「元初まりの話」に登場する動物たち（10）

「しゃち」と「しゃちほこ」について①

おやさと研究所教授
佐藤　孝則　*Takanori Sato*

天理教における「元初まりの話」は、根源的で普遍的なものである。それゆえ、その神意を理解することは決して容易ではない。そうであるからこそ、教祖は“見立て”という理解しやすいたとえ話を通して、私たちにさまざまな守護を教示されているのである。

中山正善二代真柱が著した『こふきの研究』には、いわゆる「古記本」の一つ「桝井本・五」が紹介されている。この「桝井本」には、月日親神は、「しやちほこ」という「うを」は「いきをいつよく、へんにしやくばる」ことから、「おとこの一のとふく」に仕込み、「人げんのほね」の守護としたとある。また、『天理教教典』第三章には、月日親神は、「うを」に「男一の道具、及び、骨つっぱりの道具」を仕込むため、「乾の方」から「しやち」を呼び寄せたとある。

上述したように、月日親神は男雛型の「うを」に上記の道具を仕込むため、乾の方角から「しゃち」あるいは「しゃちほこ」を呼び寄せたとあるが、私たちはいったいどのような生きものとして認識すればいいのだろうか。以下では、「しゃち」と「しゃちほこ」に分けて考察する。そのさい、江戸時代末頃の庶民の知識、認識を基本にした。

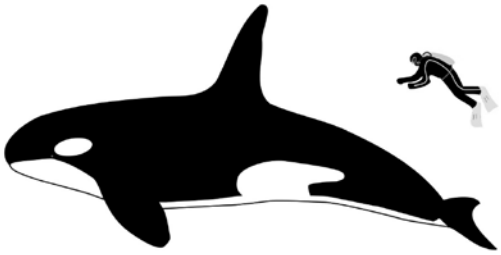

図１．雄のシャチと人間との大きさの比較。Wikipedia より引用。

「しゃち」はシャチ Orca を意味し、哺乳類のクジラの仲間に分類される。全長は雄で約９m、雌で約７m（図１）。堅くて鋭い背びれは 1.5 ～２m に達し、体色は背面が黒、腹面が白色。日本では北海道東部の太平洋沖やオホーツク海、それに和歌山県の太平洋沖などで時々見かける。肉食性で、海の中には天敵はいない。知能は高く、餌とするアザラシやオタリアを捕食する時も荒々しく獰猛に見える。群れで襲う時は役割分担を徹底し、効率よく捕獲する。捕獲した個体は、生きている場合は海面上に放り投げてもてあそび、餌動物に苦痛を与えながら捕食することもある。それゆえ、Killer whale（殺し屋クジラ）という異名をもつ。学名の *Orcinus orca* は「冥界よりの魔物」という意味である。

シャチは、和歌山県太地町の沖合を群れで泳ぐことがある。それは、江戸時代（1661 ～ 1662 年頃、および 1725 年）に描かれた『鯨絵巻』に、シャチの絵図（図２）などが描かれていることからも明らかである。シャチの絵図は特徴的で、その後に登場する絵図にもたびたび引用されている（森・宮崎、2012）。

シャチはイルカと同じようにクジラの仲間で、『鯨絵巻』に描かれることは多い。ただ江戸時代に描かれたシャチの頭頂部は丸く盛り上がり、ゴンドウクジラと似たような頭部で描かれている（図２）。明らかに、一般的なクジラのイメージで表現されている。しかし背びれは、ゴンドウクジラよりも長く大きく描かれており、シャチに類似する。

図２．シャチを描いた絵図。頭頂部が盛り上がっていることから、一般的なクジラのイメージで描かれている。森・宮崎（2012）より引用。

当時、捕鯨をおこなう漁師だけでなく、一般にも、クジラ類は魚類とは異なり、親子愛が著しく優しい心を持った動物だとの認識はあったと考える。それは江戸時代に愛読されていた『和漢三才図会』や『本朝食鑑』に、危険に遭遇した母鯨は身をもって「子を掩（おお）う」と記されていることからも類推できる。にもかかわらず、『和漢三才図会』や『本朝食鑑』では、クジラ類を魚類に分類している。それは、森・宮崎（2012）が指摘するように、当時は「鯨の形態や習性が他の魚類と異なることは，漁夫の間では知られていた。しかし，鯨が海中に住むことから，魚の一種である」と考えたのも、そんなに違和感はなかったからである。

一方、1725（享保 10）年に描かれた『鯨絵巻』に、シャチが「シャチホコ鯨」と記されていたように、「しゃち」と「しゃちほこ」は江戸時代中頃にはすでに同義語とされていたようである。

1712（正徳２）年に編纂された当時の百科事典、『和漢三才図会』には、「しゃちほこ」の漢字に「魚虎」があてられ、たとえば「之を魚虎切りと謂う」というような表現として使われている。そして、「魚虎」の姿は魚で頭部は虎の顔、尾びれは常に天を向き、背中にはいくつもの鋭い刺をもつという。まさに想像上の動物である。幕末から明治の初め頃まで、庶民に親しまれてきた『和漢三才図会』に、「鯱」・「鯱鉾」が表記されていないことは、この文字が国字（和製漢字）として作成されたことと関連していると思われる。おそらく、シャチの背びれは高さが 1.5 ～２m であることから、柄のない両刃の剣、すなわち「鉾」に見立て、魚虎の背中に付いた鉾、「鯱鉾」という国字ができたのではないかと考える。

図２に示した「しゃち」の図の中に、「一名さかまた」と記されている。この「さかまた」は「しゃち」の別名として江戸時代からすでに普通に使われていたという。「さかまた」（逆又、または逆戟）が由来で、シャチの背びれ（図１）が水面から垂直に高く立った状態を、古代中国の武器「戟（げき）」に見立てたのではないかと考える。

いずれにおいても、江戸時代から「しゃち」と「しゃちほこ」は同義に用いられ、クジラの仲間のシャチと、想像上の動物「魚虎」の二つの意味に使われてきたが、その間に、「鯱」「鯱鉾」の国字があてられたのではないかと考える。

【引用文献】

森弘子・宮崎克則（2012）「西海捕鯨絵巻の特徴 ―紀州地方の捕鯨絵巻との比較から―」『西南学院大学国際文化論集』26（２），117-155.